九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

児童・生徒の自転車事故抑制を目的とした心理的要因の研究 : 運転ならびにヘルメット不着用の背景分析と教育指導者に関する一提案

谷口, 嘉男

https://hdl.handle.net/2324/4475205

出版情報：Kyushu University, 2020, 博士（学術）, 課程博士
バージョン：
権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

（様式３）

氏　　名　：谷　口　　嘉　男

論 文 名　：児童・生徒の自転車事故抑制を目的とした心理的要因の研究
～運転ならびにヘルメット不着用の背景分析と教育指導者に関する一提案～

区　　分　：甲

論　文　内　容　の　要　旨

自転車は子どもから高齢者に至るまで幅広い年齢層が利用できる乗り物である。しかし，自転車が関係する交通事故は交通事故全体の２割弱を占め，小学校中学年以降中年期までは，歩行時よりも自転車運転時の交通事故のほうが多い。特に自転車事故が目立つ中学生・高校生では，自転車事故のおよそ６割は登下校中に発生している。

本研究では，小学生・中学生・高校生の自転車事故の抑制を目的として，一連の質問紙調査を実施した。小学生から中学生へ，そして高校生へと学年が進むにつれて，交通ルールの理解は深まっているのか，日常生活における行動の社会的望ましさは自転車をはじめとした交通に関する態度と対応しているかどうかについて検討した。また，乗車用安全帽（ヘルメット）は頭部損傷の軽減に効果が認められているが，着用率はまだ高いとは言えない状況にある。そこで，質問紙調査によりその原因を探った。学校では自転車教育が実施されているが，改善の余地が多く残されている。改善すべき点の一つが教育指導者に関するものである。学校教員が担当した場合，交通に関する十分な知識を有している教員ばかりとは限らず，また警察官が担当した場合には，児童・生徒の発達段階に応じた適切な指導が細かにできるわけではない。本論文では，自動車教習所指導員の中学生・高校生との関わりや教育に対する積極性について分析することにより，彼らがこの教育指導を担当することを提案した。

本稿は５章で構成されている。

第１章では，児童・生徒を取り巻く自転車に関する交通事故の実態やヘルメット着用の効果と現状等について説明するとともに，自転車に関する交通安全教育の実状について言及した。

第２章，前半部分では，小学生・中学生・高校生を対象に質問紙調査を実施し，自転車運転行動や法令理解，日常行動に関して，性別や学年等において特徴がみられるかどうかを検討した。その結果，小学生では男子よりも女子の方があいさつや環境への意識などについて社会的に望ましい評価をする傾向があり，自転車の衝突危険を感じることも少ない評定であった。中学生になると，一旦その傾向がほとんど見られなくなるが，高校生では男子よりも女子のほうが社会的に望ましい評価は高いままである一方で，衝突危険をより感じていた。後半部分では，中学生と高校生を対象とした調査データに基づいて，自転車運転行動を決定する心理要因の分析を行った。ここでは，因子分析等の結果から，二人乗りや携帯電話の使用などの「危険な運転」をする者は，交通ルールや日常の環境への取り組みなどの「社会的望ましさ」の意識が低く，歩行者や自動車とぶつかりそうになる「危険経験」が多いことを述べた。

第３章は，小学生・中学生のヘルメット着用に関係する背景要因を明らかにした。自転車運転・交通行動，日常行動およびヘルメットの着用に関する質問紙調査の分析から，基本的に，学年が進

むにつれて，男女ともに自転車運転・交通行動において危険な行動をしていることが多くなることが示された。また，横断歩道横断時や自動車助手席でのシートベルト着用などにおいて危険な行動が多い者は，自転車乗車中にも危険な行動が多いことが示された。さらに，学年が進むにつれて男女ともに日常行動の模範的行動が減少し，ヘルメット着用も少なくなることが明らかになった。

第４章では，自転車の安全教育指導をする側に関する調査に基づいて分析をした。自動車教習所指導員が自転車の交通教育にもより積極的に関わることの可能性について検討した。前半では，指導員の本来の業務である自動車教習そのもの対する取り組みについて分析した。教習生とのコミュニケーションを図る能力に必要な社会的外向性の高い指導員は，社会的マナーを教習生に積極的に教える姿勢がみられ,踏切や一時停止場所での指導員自身の運転行動にも望ましい態度がみられた。後半部分では，自動車教習所指導員を対象として自転車の乗り方，生徒との接し方，教育手法などの項目について検討した。比較対象として,安全運転管理者および運行管理者のデータも収集した。指導員は，中学生・高校生の自転車の乗り方の評価が安全運転管理者等より厳しく，自己の評価も厳しい傾向が示された。また，指導員は自己の模範意識が高いほど自転車運転者にも遵法精神や違反に対するペナルティが必要と考える意識が高かったが，安全運転管理者等にはそのような関連がみられなかった。

こうした結果に基づいて，第５章では総括検討を行った。本稿で小学生・中学生・高校生の自転車運転行動について自転車を主とする交通行動の実態や背景要因とともに，ヘルメット着用に関する背景要因についても言及し，交通安全教育実施者として自動車教習所指導員を登用することを提案した。また教育カリキュラムの構想やその問題点とともにヘルメット着用についての考察など，今後の課題や展望について述べた。